

浄

monthly
JODO

土
6

June 2004



法然上人讃仰会



昭和48年10月号



昭和48年11月号



昭和48年12月号



昭和49年1月号



昭和49年2月号



昭和49年3月号



昭和49年4月号



昭和49年5月号



昭和49年6月号



昭和49年7月号



昭和49年8月号



昭和49年9月号



昭和49年10月号



昭和49年11月号



昭和49年12月号



昭和50年1月号

浄土

2004/6月号 目次

講演概録 仏教とキリスト教 第2回	ひろさちや	2
表紙のことば	石川忠夫	17
会いたい人 神田伯龍①	関 容子	18
響流十方	林田康順	26
浄土宗周辺の人々	佐々木美冬	30
連載 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	34
Jフォーラム		41
こどものはいく		42
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ『さっちゃんねッ』	かまちよしろう	47
編集後記		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆 猊下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

(株) ティー・マップ主催
「みとら」セミナーより

仏教と キリスト教

第2回

ひろさちや

宗教評論家

イエスは、「あなた方、私が直接神の言葉を預かってきたんだよ。持ってきたんだよ。神の子として。あなた方はもはや、律法にさえ縛られる必要はない」というメッセージを持って来たわけです。だから、本当の意味で、真の意味でも自由になっているわけです。これが非常に大事なところなんです。だから、キリスト教徒の新約というのは、あくまでも旧約があつての上での新約なんです。このところを間違えないでほしい。旧約が下敷きにあるわけです。そして、旧約は、廃止されたわけでは全くないわけで、新約というのは旧約の上に乗っかっている新約なんです。だから、新約聖書だけ読んでいても、改正したところだけしか書いていないわけなので、全然意味がわからないはずなんです。いつもイエスが言っているのは、旧約を下敷きにして言うわけです。たとえば、「目には目を、歯には歯を、と言えり」と。目には目を、歯には歯をというのは、旧約の掟なんです。

それで、目には目を、歯には歯をというものが、とんでもない。日本人のほうが野蛮なんです。

日本人はどうですか。片目をつぶされたら、「あの野郎、殺してやる」と言うでしょう。これは「目には目を」になっちゃうんです。そうでしょう。片目をつぶされただけで、「あの野郎殺してやる」なんて言ったら、これは拡大報復です。「目をつぶされたら相手の目をつぶす権利があなたにはあるよ」ということなんです。旧約聖書をもっと条文通り読んでみるならば、「私が相手の片目をつぶしたならば、私は自分の片目をつぶすことによって相手に対する損害を補償しなければならない」とあるんです。だから、「相手から復讐する」という意味ではなくて、「自分が相手の片目をつぶせば、自分も片目をつぶす必要がある」。それがないと相手に対して謝罪にならないという意味なんです。

たとえば、齒を一本折られたら、一本折り返す権利を相手に与えるという、これが旧約の条項です。だから、齒を一本折られて、仕返しに相手の齒を三本折っちゃえば、あと二本折られ返されます。ですから、この旧約聖書の「目には目を、齒には齒を」というものは、そんなに悪い掟ではないんです。

逆に、今のイスラエルのほうはひどい拡大報復です。三人殺されたからといって、パレスチナに対して無差別攻撃をしています。ああいうのを拡大報復といって、絶対聖書が禁じていることです。アメリカは、ニューヨークでテロをやられて、五千人殺されました。それだったら、五千人しか殺す権利はないんです。逆に言ったら、我々日本人は、三十万人原爆で殺されたんだから、アメリカ人をあと三十万人殺す権利が我々にある、ということになります。

それはともかく、イエスが言うわけです。「目には目を、齒に齒をと言えり。されど、

われは告ぐ、左の頬を打たれたら右の頬を差し出せ」と。つまり、旧約を踏まえ、「拡大報復はいけない。」と言っています。「自分の受けた被害だけ報復する権利がある。でも私は言うのだ。右の頬を打たれたら、左の頬を差し出せ。」と言って、許しの原理を述べるわけです。だから、あくまでも旧約を基本にして言っているのが、イエスの発言だけ聞いていけば、甘っちょろいことを言っているなというふうな感じしか受けないわけです。

そして、キリスト教徒というのは、ここで初めて自由を獲得します。自由ということは、もう律法に縛られなくてもいいんだ。だから、あなた方は何を食べようと、何を飲もうと思いたい煩うなというわけです。

ユダヤ教徒であれば、食物規定はちゃんとあるわけです。海や川にいる動物のうち、食べていいものは、ひれとうろこのあるもの。ひれとうろこのないものは食べてはいけません。だからうなぎは食べられません。貝も食

べてはいけない。それから、タコもイカもエビもカニも、皆食べられないのです。反芻する動物で、ひづめが割れているものしか食べてはいけない。だから豚なんか食べられません。

しかし、イエスになると、そんな律法からも自由なんです。「あなた方は自由であるよ」という、イエスはこのメッセージを伝えたわ

仏教における自由、自灯明・法灯明

仏教の場合、お釈迦さまがお亡くなりになる直前に、アーナンダに対して言われた言葉があります。お釈迦さまが亡くなったあととは、この世の中は闇になります。お釈迦さまという偉大なる導き手を失うので、そうしたときに、私たちはこの闇を、どのようにして歩めばいいか。それは、「あなた方は自分自身を灯明にしないでください。そして、私の教えた真理を灯明にしないでください」と言われたわけです。闇を照らしていく灯明です。

けです。このところが非常に大事でありまして、これがキリスト教の根幹にある思想です。「あなた方は自由なのです」この「自由」ということはあくまでも「自分による」ということです。このところが大事です。「自分によって判断しないで」ということなんです。

法というのは、ダルマといって、この場合真理という意味です。「私があなた方に教えたその法（真理）を灯明にせよ。しかし、その前に、自分自身を灯明にしないで」と言っておられるわけです。この、「自灯明・法灯明」という言葉は非常に大事な言葉なんです。これが、ある意味ではお釈迦さまの基本精神だと思ってください。

ところが、後に小乗仏教というものが出てくる。それは大きな間違いをしたわけです。

小乗仏教というのはどういう仏教かというと、お釈迦さまはさまざまな教えを説かれたわけですね。お釈迦さまが生前に教えを説かれたものが、八万四千の法門だと言われている。八万四千というのは、多数という意味なんです。日本人だったら「嘘八百」とか、大体八百くらいが多数になるんですが、インド人がいつも多数というときは桁が違って、八万四千なんていうわけです。

お釈迦さまは、対機説法といって、いろいろな人にそれぞれにふさわしい教えを説かれたわけですね。怠け者には、「お前怠けぢやいかんぞ。もっとまじめにやれ」といって教えを説いておられる。同時に、今度は、余りにも過度に張り詰めているものには、「お前もつと怠けなさい」と言って教えておられるわけですね。これがお釈迦さまの説法の基本で、これを対機説法と言います。

相手の機根ですね、性質や能力など、その機に応じて説法されました。相手によって、

それぞれにふさわしい教えを説かれるのがお釈迦さまの基本的態度です。

ところが、実はお釈迦さまが亡くなった直後に、摩訶迦葉（まかしよう）という長老がいたんですが、その長老が、「お釈迦さまの教えられた教えというものを今ちゃんとまとめておかないと、後世になって、私はお釈迦さまからこのように教わった、とお釈迦さまが言ってもおられない邪説を主張するやつが出てくるに違いない。そうなると仏教というのが何かわからなくなってしまう」と言ったわけですね。

そこで、お釈迦さまの教えをしつかりまとめ上げる必要があると言って、結集（けつじゆう）という集会を開きます。そしてその場で、ずっとお釈迦さまの侍者をやっていたアーナンダ（阿難）という男を議長（主任）にしながら、アーナンダが「私はお釈迦さまからこういうふうに教わりました。そして、その場でこういう説法をされたんだ」という

わけです。そうしたら皆が「ああそうだ、そうだ。お釈迦さまはそう言われた。間違いない」といつて皆で確認して一つ一つお経をつくっていききました。「如是我聞」です。そうすると八万四千になったという伝説があるわけなんです。

だから、お経はみんな如是我聞で始まりま
す。「如是我聞（かくのごとくわれきり）」
という文句で文章が始まるわけです。「私は
このように聞きましたよ」とアーナンダが言
うわけです。「如是我聞 一時仏在舎衛國
祇樹給孤独園」というふうに「ある時お釈迦
さまは王舎城においてになった」とあるいは
「祇園精舎においてになったんだ」と場所を
言って、それから「与大比丘衆 千二百五十
人俱」と、「その時いたのは誰々であった」と
いうふうな名前を挙げています。

ところが、この「結集」（經典編纂會議）
を、「そんなのおかしいじゃないか」と言っ
てすっぱ抜かしたやつが相当いるんです。

「お釈迦さまが私に教えてくださった教え、
私が聞いた教えは、私のためにお釈迦さまが
説法してくださったことだ。だから私が聞いた
ことを私が守るんだ。他の人で大勢確認し
あう必要なんかちつともないじゃないか」と
いう意見も出てくるわけです。

主流派は、皆でまとめあげたものですから、
「私たちがまとめたのが正当な仏教なんだ」
と言って主張するけれども、それを「そんな
ものは認めない」という派があつたわけです。
その派閥の争いというのが小乗仏教の段階で
出てきます。

私は公平に読んでみたら、お釈迦さまはや
っぱりそれぞれに応じて説法されたんだか
ら、それを全部まとめて「これがお経なんだ、
一つのお経なんだ、これがお釈迦さまの教え
だ」とまとめる事はちよつとおかしいじゃな
いかと思うんです。そういう意味では、その
ような經典編纂會議をやったのは、間違いか
もしれない。

でも、これがなかったら、今仏教というのは続いていないと思います。「これが仏教なんだ」と、皆がてんでばらばらな教えを主張すれば、本当の仏教って何かわからなくなっていくわけです。だからある意味で、まとめあげてくれたのは摩訶迦葉という長老のひとりの功績なんだけれども、同時におかしなことをやったことになるのです。

仏教の持つる法灯明の精神は、結集によって一つの法にまとめあげることができたかもしれないけれども、その前にお釈迦さまが「自分を大事にしなさい」と言っておられる「自灯明」の部分が欠けてくるようになります。だから、私たちが今仏教というものを学ぶために、やっぱり自分というものをもちと大事にすべきなんです。

私たちは、お釈迦さまの教えをどう聞くか。仏教には八万四千のいろんな教えがありますから、そのうちの私にぴったりの教えというものを見つけて出してくる。それが自灯明の意

味だろうと思っはしいのです。

これは、戒律についても同じことが言えるわけで、八万四千の法門をまとめると同時に、「お釈迦さまの教えられた戒律、制定された戒律をまとめよう」というわけです。これも第一回目の結集でやったことなんです。この戒律をまとめるという時はウパーリ（優波離）という者が主任になりました。彼が戒律に詳しくあったんで戒律部門をまとめる仕事をしたわけです。

ところが、そのときに「ちょっと待ってください。戒律については実はお釈迦さまの遺言があるんです」と、アーナンダが大変なことを言い始めます。その遺言って何だって言ったら、「私が死んだあとは、私が制定した小々戒は廃止してよろしい」と。つまり、「ちっばけなこまごました戒律は全部廃止なさい」ということです。「そういうふうにお釈迦さまは指示されました」とアーナンダが発言するんです。

議長であつた摩訶迦葉は「え、そうなの」とびっくりします。「お釈迦さまはそんなことと言われたの。それじゃ、その小々戒というものがあるか、一体どの戒とどの戒がこまごました戒律なのか、しっかりあなたは聞いたか」と尋ねたら、アーナンダは、「あ、すいません、あの、聞きませんでした」って言うわけです。「お前なんてことやったんだ、お前馬鹿じゃないか、こまごました戒律を廃止していいって、どれとどれがこまごましてるのか、ちゃんと確かめないでけしからんじゃないか」と、アーナンダはこっぴどく怒られるわけなんです。

それで結局「じゃあ、どうしようか」ということになってすったもんだするんですが、「細かな戒はお釈迦さまが廃止しなさいと言っているけれども、どれとどれを廃止していいかわかんないから、制定された戒律は全部守ろう」ということになって「二百五十戒」という、二百五十もの戒律が出来上がったわ

けです。

ただ、私はちよつとおかしいと思うんです。まずアーナンダが「お前さん、何と何が小々戒なのか確かめたのか」と聞かれて、「あの、聞いてません」って答えています。そして「お前なんて馬鹿なことやっただ」と怒られています。これ、悪いのは誰だと思えますか？ お釈迦さまです。だって、アーナンダが「はい、そうですか」と言つて、「じゃあ、どの戒とどの戒とを廃止したらいいんですか」とアーナンダが聞かなければ、「お前わかつてんのか」とお釈迦さまが言うべきです。そうでしょう。アーナンダが聞き忘れたと言いますが、聞き忘れたのではなく、お釈迦さまが言い忘れたのです。

じゃあ、お釈迦さまがなぜそんなふうになぜなかったかといつたら、どう思いますか？ なぜそんなふうにお釈迦さまの方から確かめないのかと言ったら、お釈迦さまは、ちゃんと大原則を決めておられたからです。まず自

灯明なんです。「まず自分で決めなさい」というわけです。

要するに「どの戒とどの戒が大事な戒なのか、どの戒はこまごましてるんだ」というのを自分で決めればいいって言うのがお釈迦さまの根本精神だったんです。このところを間違えないでほしいんです。仏教というのは、

みんなが幸せになるために

ではもう一回キリスト教に戻ります。イエスは私たちに何を教えたのか。実は、イエスは余り大したことを教えてないんです。聖書を読んだって、イエスの教えはほとんど出てきません。新約聖書のイエスの発言を分類して読んでみたら、一番数多く言ってるのは「私に従ってきなさい」という言葉なんです。「俺について来い」としか言っていないんです。でも、ついに行ってどこに行くかも何も言っていないんです。「ただついていけばいい」という、ある意味では命令型宗教なんです。

あくまでも自由なんです。「自分による」ということです。

前回お話ししたキリスト教の自由も、「あなた方は自分によりなさい」と、もはや神の奴隷にすらなる必要はないのです。このところが仏教とキリスト教の非常に一致した点です。

自由ということを言いながらも命令型になっています。これはユダヤ教の本質だろうと思います。

唯一、イエスの発言で思想らしい本質的なものは何かと言ったら、「神の国は近づけり」ということです。これがキリスト教のある意味での本質かもしれません。どういう意味かといいますと、「神の国」というのはお浄土みたいな土地の意味ではなくて、「神様が支配する国」という意味だと受け止めてもらいたほうがいいです。

それはどういふことかと言えば、私たちは、今まで生きてきた過去・現在を含んで、「人の国」に生きてゐるわけなんです。人間がここで支配してゐるわけです。人間が、良い悪いといった、いろんな価値判断を持って生きてゐるんです。それが、「一つのここに断絶があつて、『神の国』が今現在ここから始まるんだ」ということです。

「近づけり」といふのは、「もうすでに神の支配が始まつてゐる」といふ意味を含んだ「近づけり」だそうなんです。私は、ヘブライ語の文法はよくわからないんですが、現在を含んだ未来形、つまり近未来形だということです。だから、「神の支配はもうすでに始まつてゐるよ」といふメッセージがこの中に含まれてゐます。

しかし、この世界はまだ神様が直接支配するには至つてゐないんです。まだ人間の支配を受けてゐる国なんです。どこかで神の国の実現を妨害する勢力があるので、神の国は完

全には実現してゐないんです。しかし「もはや近づいてきたから、必ず、近い将来、神様の世界に入ることができると言ふんだよ」といふメッセージだと思つていただきたいです。

神の国というものはあらゆる人を幸福にしたいのです。「すべての人を幸福にしてやりたい」といふのが神様の意思だと思つてください。仏教的に言へば「願ひがある」といふことです。そうすると、神の国といふものは、あらゆる人を幸せにしないといけないわけです。

あらゆる人を幸せにするためのプログラムが難しいです。たとえば、今病氣をやつてゐる人間の病氣を治すことによって、その人は幸せになるだろうか。わかりません。病氣が治つた人間が「ああ病氣が治つた」つていつて浮氣しちやつて、家庭をめちゃめちゃにするかもしれないし、宝くじでお金欲しいと思ふ人に、神様が一億円を与えたら、その金で亭主が浮氣する、女房は不倫する、子供

は麻薬を買ったりして非行に走るとかで家庭がめっちゃめっちゃになるかもしれないわけです。

だから、こういうふうにしたら皆が幸せになるかわかりません。そして、病人の病気を治すことによって、もしその人間が幸せになっても、今度はお医者さんが食べていけないので困るんです。そうすると、やっぱり皆を幸せにするためにはどうしたらいいのかというのとはわからないんです。あらゆる人が幸せになるプログラムをつくるのは難しいんです。ちょうど演劇みたいなものだと思います。ください。あるときには悲劇を起こさないといけないわけです。

この辺になると仏教の話とオーバーラップしてくるから、仏様の願いと神様の願いというものは、一緒にして論じてもらっていいわけです。仏様のプログラムだって、あらゆる人を幸せにしたいわけです。それにはどうしたらいいか。

たとえば、観無量寿經というお経があります。これは浄土教のほうで読むお経なんです。が、韋提希（いだいけ）夫人の夫が頻婆娑羅（びんばしやら）王で、息子の阿闍世（あじやせ）王子が父親を殺そうとするわけです。そして王を牢獄に閉じ込めたんです。

そこで韋提希夫人が、「何とかして自分の夫を生きながらえさせたい、生きながらえさせておくと、いつか息子はひょっとしたら、気持ちを変えてくれるかもしれない」ということで、自分の体に蜜で食料を塗って夫に運んだりするわけです。

息子は「親父はもう死んだか」と、門番に聞くけれども、「いえ、まだびんびんしておられます」と言われるわけです。「何でだ」って訊いたら、「どうも韋提希夫人が食料を運んでおられるようだ」ということで、息子はお母さんまで殺そうとするんです。

結局殺すのはいとどまって、幽閉するわけなんです。その絶望の状況の中で韋提希

夫人は、「お釈迦さま助けてください」と救いを求めるんです。そうすると、お釈迦さまはすつと雲に乗って牢獄にこられて、そして韋提希夫人に極楽浄土を教えられた、というお経なんです。そういう状況下で教えを説かれたということなんです。

これはどういうことかって言えば、たとえば、昨年十月二十三日に六甲おろし（嵐）が渦巻く甲子園球場で、阪神タイガースがタイエーホークスと日本一を争ってる、その場にお釈迦さまが出て、「いいかい、これより西方に極楽浄土があるんだよ」なんて言ったって、誰も聞いてくれないわけです。皆ワーーと六甲嵐を歌ってるわけですから。

大きな宇宙の価値観から見ると

あるいは、神様や仏様が将棋をしてるんです。「桂馬をあの歩一つと交換だ」とか言ってます。これは無駄遣いだって言いますが、将棋を詰めるためにはどうしても歩が必要な場合

だから、子供が自分の父親を殺し、母親まで殺そうとしている、その絶望の状況の中で救いを求めて、初めてお釈迦さまが「ああ、そうなんだよ。極楽浄土があるんだよ」と説けるんです。これを変な状況で説いたって意味はなくなるわけです。そうすると、その極楽浄土の教えを説くチャンスをつくるためには、韋提希夫人に泣いてもらうしかないわけです。「あなたつらいだらうけどね、ちょっとここで、絶望の状況に陥っておくれ」という手配をしておられるわけです。それがあある意味で、神様、仏様の演劇なんです。神様、仏様はシナリオライターなんです。

もあるんですね。飛車よりも歩のほうが役に立つことがあるんです。そういう状況の中で、人はいろんな役割があるわけです。仏様や神様は、皆に頼んでおられるんです。そして、

この世の中はそういう形で、最終的にすばらしい神の国にしようというプログラムのもとで個々の人間の運命が決まっているんです。そうすると、どの人がいい人間なのか、どの人が価値あるのか、この世の中で悪役をやらされている人は、そのほうがかえって価値が大きいかもしれないわけです。

私たちのこの人間が商品化された、こんな世の中の価値だけでものを見ちゃいけない。大きな大きな宇宙の価値観から見たほうがいいということが、仏教もキリスト教も共に主張しているところなんです。

私たちの「人の国」である現実の社会は、競争社会になっています。日本人は、この競争社会の中で「競争」というのを当たり前に受け入れているんです。「だって人類は皆競争をするんでしょう」なんて言います。しかし、よくよく考えて、最近の遺伝子の理論だとか、そういうものから見たら、そんな競争という原理はほとんどないっていうんです。

「遺伝子の中に初めから全部仕込まれているんだ」という説のほうが強くなってきたんです。どの遺伝子も皆一つの遺伝子が全生物に及んでいるという意味で、一切衆生悉有仏性的な考えっていうのは、遺伝子工学のほうでわかってきているわけなんです。でも、私たちは競争社会の中にいると、競争というのは当たり前になっているんです。

しかし、それは違います。競争したい、競争に勝ちたいという気もあるかもしれないけれども、逆に競争なんかしたくない。皆で仲良くしたいという気持ちも、人間は持っているんです。でも、今の資本主義国の中でのものを見ると、競争ばかりが是認されるわけでしょう。人間の中にある「競争なんかしたくないんだ。皆で仲良く暮らしたい」という願いみたいなものを忘れてしまっているんです。「そんなのはおとぎ話みたいなものだ」と言っていて切り捨てられていくんです。そうじゃないんです。あらゆる人の幸せが、神や仏の願いな

んです。「この宇宙の中にそういう願いが働いているんだよ」ということが信じられたとき、私たちはふっと楽になれるんです。

だから、「あらゆる人が幸せになつてほしいんだ。そのために、あなたが今ここでちょっと泣くこともあるかもしれない。でも、それは頼むよ。そして、つらいだろうけども、必ず私の神の国に来れば、仏の国に来れば、あなた方、必ず幸せになれるから」というわけです。

今のこの人生というものが絶対じゃないわ

けです。私たちはいつの間にか、死んでしま

えば何にもなくなるなんて思っています。生きている間だけが人生だというふうな感覚になると、恐ろしいことになってしまいます。生きている間ですべてが決まってしまうえば、逆に人間が生きている間、何やったつていいという思想になってしまふわけです。「今得しないことには取り返しがつかない。今損すれば、もう永遠の損なんだ」と思うわけです。しかし、もつともつと長い人生なんです。キリスト教は「永遠の命」といいます。「そ

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門 古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018002145231

んなばかな。死なないわけがないだろう」と最初は思っていたわけですが、私たちの命っていうものは、単に氷山の一角です。今海の上に現れているこの命の姿の奥には、もっと大きなものが隠されているんです。

だから、インド人は「輪廻転生」ということを信じているんです。輪廻転生の中で、結局私たちはいろんな形態をとるわけです。人間が生きている限り、ある場合は α になり、 β になり、 γ になり、いろんな姿形をとっていく。そして、この輪廻が永遠になれば無限大の価値があるわけです。そうすると、全部合わせると、 $A+B+C+D$ というふうに全部無限大になるわけです。それが輪廻の思想です。そして、このそれぞれの無限の輪廻を重ねる、その無限の繰り返しの中に価値があるわけです。

今私たちは、たとえば貧乏人になっている。

または女になっているとか、男だとか。そういうあるひとつの状態で生きています。しかし、これはある意味では無限大分の一なんです。無限大分の一しかないんです。その無限大分の一の部分だけでもを見ようとしているのが私たちなんです。でも、永遠の命の、長い長い命の連続みたいなものを考えたとき、初めて私たち人間の本物の価値がわかってくるんです。「本物の価値というのは、皆同じ価値なんだよ。どんな人も、皆同じ価値なんだ」ということが見えてくるんです。それが宗教の本質だろうと思うわけです。

だから、仏教とキリスト教というのは、ある意味で非常に良く似ています。「自由」ということ、「自分を大事にしろ」ということ。そこを教えてくださいるのが宗教だということになると思います。
(おわり)

表紙のことは

6月

青鬼螢祭

滋賀県大津市、東寺真言宗石山寺で六月第二土曜日に開催される。

平安末期に出た石山寺の名僧朗澄律師は「死後も鬼の姿になって仏法を守護しよう」と誓った。死後、弟子の行宴は夢告を得、金色の鬼に変じた師の霊と出会ったという。

その伝説と、寺の近くにある通称「螢谷」とを合わせて創られた新しい祭りで、藁や杉の枝でつくられた巨大な青鬼が祀られ、青鬼役、螢の精が練り歩き、太鼓、踊りが披露される。

連載

会いたい人
関 容子

神田
伯龍
さん
①



講談は、軍記、武勇伝、敵討ちなどの話を調子をつけて面白く語り聞かせる芸だが、中でも俠客物、白浪物などの世話講談を得意とする「世話読み」の第一人者が六代目神田伯龍さんだ。講談は「語る」とは言わず「読む」と言う。元々は本を前に置き、実際には本を見ないで語ったもので、つまりこれは本に書いてあることですからいい加減な話ではありませんよ、というデモンストレーションであったらしい。しかし一方「講釈師見てきたような嘘をつき」という川柳もあつたつけ。

伯龍さんの十八番『鼠小僧』を聴いたことがある。歯切れがよくてやや高めで澄明なその口跡で、本物の江戸言葉がよどみなく語られる。ゆつたりと大舟に乗った気分です。傾ける時間が何とも心地よかった。

伯龍さんは大正十五年、東京大森海岸に生まれました。百二十年以上続いた天ぷら蟹料理の河内家が生家。

「この間、ある雑誌で小沢昭一さんと話しましたらね、戦争中に建物強制疎開というのがあつて、空襲されたときの類焼を防ぐために大きな家を間引きのために取り壊す、という乱暴なことをやったんですよ。建物を綱をかけたましてね、大勢で引つ張つて引き倒すんですが、学徒動員でわたしの家を壊した一人が、小沢さんだった（笑）。芸者の入る料理屋で、舞台もあつていい家だったんだけど、それで跡形もなくなつて、結局爆弾は落ちなかったんだから、バカな話でしたよ」

伯龍さんは独演会の会場にお寺のホールなどを借りたりしているが、もしこの家が壊されてなかったらよかったのに……。

「ほんとにそうなんです。とにかくいい思い出を育ちましたよ。芸者がうちの店に呼んでもらいたい一心で、競争でわたしを可愛がってくれる。尋常小学校に上るまで、芸者として風呂に入ることがないんですから（笑）。また学校へ行ってもあのころとしては

珍しく男女組でね、土地柄から大森芸者の下地っ子が大勢いました。従っていい女ばっかり見て育つてますから、自然と免疫ができてしまつて、器量だけ見て惚れるということがなくなりました。女の中に転がして寝かしといても何事も無い（笑）、という男ができあがりました」

もちろんこれは冗談で、かなり早熟な伯龍さんは芸者といい仲になり、一騒動あつたらしいが、その前に少年時代の腕白ぶりについて聞く。

「学校は嫌いで相撲と寄席が大好き、というんですから困つたものですが、土地の子供相撲で横綱を張つたこともあるから強かつたんです。わたしの母方の親戚に双葉山、玉錦時代の立行司だった木村庄之助がいますね、のちに庄翁になつた人ですけど、この人から、お前は背が足りないから相撲は無理だから、行司になればいい、と言われましたけど、あんなノコッタノコッタなんて言つてグルグル

廻つてるのはバカバカしいですからね（笑）。背丈さえ伸びれば相撲取になりたかつたんです」

伯龍さんの身長についてもエピソードがあつた。その話は、祖父の代に遡る。

「血のつながつた本当の祖父は坊さんだったんです。坊さんの妻帯は許されませんでしたから、どういう事情かで生まれたわたしの親父を他家へ養子に出したんですね。そのせいかどうか自分は偉い坊さんになつて、臨終を前にしたときに息子への償いとして、財産を総て譲りたいと言つてきたそうですが、親父は妙に潔癖で、自分を捨てた親になんか今更会いたくない、と突っぱねた。何しろ熱海の源泉まで持つてたという人だったんで、代わりにわたしが『嶮の祖父』に会いに行けばよかつた。これも惜しかつた（笑）」

伯龍さんの父の養子先は、小村井の名主の家で、亀戸、両国、錦糸町に広い土地を持つてゐるほどの素封家だったが、養父はなぜか

会いたい人

若き日の伯龍師匠。
上野松坂屋ホールでの春日とよ喜さんの会にて。



昭和三十七年二月、神田明神下
光村にて、都家かつ江さんと。

その家を弟に譲り、大森に来て料理屋を開いた。

「その奥方、つまりわたしの祖母は岡崎の城代家老の娘で、昔風の考え方から牛肉豚肉を誰にも食べさせなかったので、これが育ちざかりのわたしの背丈に影響した。祖母が亡くなって、戦後初めて豚肉のすき焼を口にしたとき、世の中にこんなうまいものがあつたのか、と思いましたよ（笑）」

相撲少年のころ、伯龍さんの最肩は三十六代横綱の玉錦だった。

「自分がまるで玉錦になったつもりで相撲を取っていましたから、その横綱が現役で亡くなったときはもうがっかりしましたね。急性盲腸炎でした。あまりにもシヨックが大きくて、熱を出して学校を休んだくらいなのに、熱でフラフラしながら両国の回向院まで玉錦の葬式に行つたんです。そうしたら学校にバレましてね、六年生のときですよ。担任の先生の先生に、お前は将来口くなものにならない、

とひどいこと言われて無性に腹が立って、卒業証書を破いて学校の便所に捨ててね（笑）、それで好きな芸人になる決心をしたんですから、やつぱりこの先生は恩人なのかも知れません」

伯龍さんと講談との出会いは、やはりこの入新井第五尋常小学校のときだった。

「徳川夢声さんの伯父さんに当たる天野雉彦という人が学校を廻って歩いて生徒に少年講談を聴かせたんです。『柳生二蓋笠』^{やぎゆうにがいがさ}でした。

それがとつても面白かった。一人でしゃべつてこんな人に人を惹きつけることができるのかとつくづく感じ入ってしまった。是非ともわたしも講談の道に進みたい、と真剣に考えるようになったんです。そのころ、うちの近くの鈴ヶ森で喫茶店をやつてる人がいて、この人の前身は大阪の有名な幫間でした」

芦辺家幸嗣^{あしべやこうじ}という元幫間は、大阪時代に世話講談の大家、五代目伯龍と知り合っていた。

そんなに講談がやりたかったら、この人の弟子になつては、とすすめてくれた。

「料理屋は忙しいですから子供なんかは放つぱりばなしですからね。朝飯なんかは板場でチヨコチヨコと自分で作つて、店にある酒をちよつと一杯ひつかけて、ついでに売り上げの入つてゐるザルからもちよつと失敬しましてね（笑）、小学校へは赤い顔のホロ酔いで行つてました。つまんなくなると学校の塀を乗り越えては寄席へ直行です。そのころ八丁堀の開楽とか深川高橋の永花亭という講釈場がありましたけれど、あんまり先代伯龍のことは覚えがなくて、六代目貞山ばかりに注目してました」

貞山の名を聞いてなつかしかった。明治生まれの私の母がその貞山蟲屋で、『義士伝』が最高だった、とよく言つていたが、私は戦後の怪談癖の七代目貞山しか聴いていない。

「六代目貞山は淡々と上品に語る人、ピンツと動かずに、仕草もあまりしない人で、まあ

こんなふうでしたよ。おなじみの赤穂義士伝で御勘弁願つときます。ギシギシと申しましても近ごろ流行のサギシなどは困ります……つてね。そこへいくとのちに弟子入りするうちの師匠の先代伯龍は、世話物だからよく動くでしょ。あれはいけない、という人もいましたけど。貞山という方は汚い言葉は絶対に使いませんでした。しかしうちの師匠もそうでしたよ。何々するつてえと……なんていう言い方はしちゃいけない、中の人物が言うのは台詞だからいいが、地の言葉で、てえとはいけない、つて厳しく言われました。噺家さんでも、言葉遣いの綺麗な人はお座敷がよくかかるんです。お子供衆に聴かしても大丈夫だつていうんでね。先代文楽、先代金馬、先代柳橋なんて方は、言葉に品がありましたからね」

ここで少し脇道にそれるが、その六代目貞山の悲しい最期について聞いた。

「浅草にね、小みつさんという芸者がいて、

貞山先生は家を出てその家にいたわけですよ。昭和二十年三月九日のあの下町大空襲の晩に、爆撃を受けて隅田公園に倒れていたそうです。見つけたのは山春という、芸人おだてちゃん金を巻き上げてるてき屋（大道商人）

の親分ですね、これが林家正蔵、のちの彦六と二人で歩いてたら、倒れてたのが貞山で、慌てて大八車を借りてきて、焼き場へ持って行ったそうです。そのとき数えの七十でしたかね」



昭和四十年四月、本牧亭茶屋にて

そして伯龍さんは先代伯龍の門を叩くことになる。最初のうち父親は猛反対だった。

「うちの家作に柳家初孝^{はつこう}という幫間^{はま}がいて、その弟子に三遊亭円遊というのちに噺家になったのがいたんですが、わたしをつかまえては、坊ちゃん噺家におんななさい、と言い続けていたんです。それで親父も、噺家にするくらいなら講談のほうがまだしも、と思うようになつたらしい。講談はもともと武家浪人がやったものですから、いくらか高尚だと思つたんでしょうかねえ（笑）」

芦辺家幸嗣に電話をかけてもらつて、伯龍さんは一人で先代に会いに行った。まだ十二歳の少年だった。

「師匠はまずこれまでに講談をやったことがあるかと訊きました。ないです、と言うとそれが正解で、何かの色がかつてると白地に

抜くのが大変だから、つて言いました。じゃあ一席やろうと言つて、『木村又藏、姉川の駆け付け』というのを三十分ばかり。聴いて一べんで憶えて、師匠の前でやりましたよ。落語は師匠が弟子に三べん聴かしてくれませんが、講談は一べんなんです。どこへ稽古に行つてもそう。それで一応、『試験』は合格で、父親を呼んでくるように言われました」

父親は行く行くは伯龍さんに料理屋を継がせたいと思つていたのだが、それでも渋々承知して先代に頭を下げてくれた。

「しかしそのあと熱を出して寝込んだそうですから、よっぽどがっかりしたんでしょうね。すまないことをしましたが、こればかりはどうしてもゆずれませんでしたからね」

（つづく）

一食のあいだに、三度ばかりおもいいでんはよき相続にて候。

(『往生浄土用心』)

たとえば一回の食事をとる間に、三度ほど思い出してお念仏を称えるならば、それはもうお念仏を相続していることになるのです。

無間修——お念仏の相続——

コンピュータの普及はめざましい。奉職している大学の学生閲覧室に足を運ぶと、学生たちはみな、各自のコンピュータを開き、画面に向かって思い思いに作業を進めている。私が大学二年の時、理工学部友人が「これ見ろ！ やつと俺、コンピュータ買ったんだよ！ 高かったんだぞ！」と興奮して仲間に見せびらかしていた光景を鮮明に覚えている。あれからわずか二十年だが、まさに隔世の感がある。かくいう私も、コンピュータのない原稿書きなど考えただけでもゾッとする。

ところで、コンピュータには大きく分けて据え置き型のタイプと持ち運びできるノート型のタイプがある。ノート型には、しばらく手を触れないと自然に電源が切れる省電力機能がついている。この機能は、電力の消費を抑えつつ、電源が切れる直前の作業状態を保存してくれる（レジューム）というすぐれものである。その機能の設定が、あらかじめこちらの都合でいかようにも決められることはいうまでもない。

とはいえ、ちょっと気を抜いたり、別の仕事にかまけていると、この機能が発動して電源が切れてしまい、再起動の必要に迫られる。無論、たいした作業ではないのだが、こんなささいなことが面倒に思えてしまう。そんなわが身がなんとも情けなく、あらためてわが凡夫の性^{さが}を再確認することになる。この機能の発動は、私たち自身の

無作為と怠慢が招く結果であり、これが発動するとコンピューターの画面は真つ暗になり、私とコンピューターとの関係は一時中断する。

ある時ふと、こうした省電力機能とお念仏を相続する心がけである無間修とが重なり合って思い浮かんだ。無間修とは、時間的に间断なくお念仏を相続することである。私たちは、いつ、どこで、どのような形でこの命を終えることになるか分からないお互いである。だからこそ法然上人は、「ただ一向に念仏すべし」と、最期臨終のゆうべまで、つねに阿弥陀さまやお浄土に心に向けて、お念仏から離れないように、お念仏を手放さないようにと私たちにお示しになられた。そのようにお念仏が相続されている状況こそ無間修であり、そうなれば、阿弥陀さまのみ心とこの私の心とが通じ合う関係がつねに保持される（無間）のである。

ところが、「臨終までお念仏を相続しなければいけないという浄土宗の教えは、阿弥陀さまの本願のお力を疑っているもので、自力の思いが抜けきれない不徹底な教えだ！」などと法然上人の教えに非難を加える者があらわれた。しかし、「わずか一遍のお念仏でも往生が叶う」と教えてくださったのは他ならぬ法然上人であって、その上人が阿弥陀さまの本願のお力を疑うはずもない。疑うべきは、決して阿弥陀さまの

側ではなく、時々刻々移ろいゆくこの現実世界に生き、それに応じてフラフラと揺れ動く心をもった私たち人間の側にこそある。だからこそ法然上人は、阿弥陀さまとの私の〈心と心が通じ合う関係〉を決して絶やさぬようと、お念仏を相続する無間修の大切さを訴えられたのである。

阿弥陀さまは、その耳をかたむけ、その目をこらして、お念仏を称える私たちのことをつねに探してくださる。そして、限らない救いの光明を放ち、お念仏を称える私たちの身も心も照らし出し、お護りになつてくださる。その光明を感じ取って明るい日々を送るか、光明を見失った暗く迷い多い日々を送るかを決めるのは、ひとえに私たち自身が修めるお念仏の相続による。

冒頭のご法話は、私たちが修めるお念仏の相続の程度、無間修のありようを分かりやすくお示しくくださった貴重なものである。「一食のあいだに三度」とは、どれほどの時間を想定されているのか、厳密なことまでは知り得ない。コンピューターの省電力機能が発動する時間と同程度だろうか。いずれにしても、お互いの関係が中断してしまう原因は、私たち凡夫の無作為であり、怠慢にこそ求められるのである。 合掌

（大正大学専任講師・林田康順）

浄土宗 周辺の人々

佐々木美冬

「生きて行くことは案外むずかしくないのかも知れない」とは武田泰淳の『蝮のすゑ』の書き出しだが、生きていてよかったという実感が、ここにはあった。確かにあった。

玉音放送からわずか3ヶ月後の昭和20年11月23日、神宮球場。「久しぶりに、本当に久しぶりに、職業野球の実況中継をお送りします」と、アナウンサー、志村正順は弾んだ声で両軍のラインナップを読み上げた。

〈東軍〉

センター

古川清蔵（名古屋）

ショート

金山次郎（名古屋）

セカンド

千葉茂（巨人）

レフト

加藤成二（名古屋）

ライト

大下弘（セネターズ）

サード

三好主（巨人）

ピッチャー

藤本英雄（巨人）

〈西軍〉

センター

呉昌征（阪神）

シヨート

上田藤夫（阪急）

セカンド

藤村富美男（阪神）

サード

鶴岡一人（近畿）

ファースト

野口明（阪急）

キャッチャー

土井垣武（阪神）

ライト

岡村利昭（近畿）

レフト

下社邦男（阪急）

ピッチャー

笠松実（阪急）

「生きていてよかった」という実感が、ここにはある。確かにある。千葉も藤本も藤村も鶴岡もみな顔にそう描いてあるじゃないか、実況の志村はそう思った。

このとき、神宮外苑は進駐軍に接收されていて、「ステートサイド・パーク」と名を変えていたが、野球好きの彼らはこの日、大いなる善意と好意をもって、日本人に球場を貸し与えてくれたのだった。

その日、神田ランボオには吉行淳之介、いだもも、矢牧一宏、遠藤鱗一郎、小川徹、

八木柊一郎、中村稔、中村真一郎といった連中が集まっていた。そのなかに鈴木百合子はいた。彼女はランボオの2階の出版社昭森社に勤務しながら、同じく森谷社長の経営する階下の喫茶店兼酒屋ランボオにも勤めていた。そして、彼女は、武田泰淳と知り合うことになる。

武田泰淳は明治45（大正1）年、東京本郷の浄土宗潮泉寺に、住職、大島泰信の次男として生まれた。浦和高校に進むころ、国文学に興味をもち、私立第一外语学校で中国語をも学びながら、反帝グループの運動に参加。東京帝大支那文学科では「第二無産者新聞」にかかわり、四回逮捕されて大学を去る。

退学後は左翼運動を離れ、芝増上寺で浄土宗の僧籍をとる。応召し、華中戦線に送られるが、後方で事務を担当し、文学書を濫読。二年後に除隊になる。

戦後の昭和22年、『娘のすゑ』を発表。昭和26年、鈴木百合子と結婚し、9月、長女花

が誕生。『風媒花』、『ひかりごけ』を発表。

昭和28年、中目黒にある長泉院に転居。百合子は能筆を買われ卒塔婆書きなどを手伝った。武田泰淳、浄土宗教師、恭蓮社謙譽泰淳としてのひとときである。

話を、神宮球場に戻そう。

アナウンサー志村正順は、この武田泰淳に遅れること1年の大正2年、同じく東京っ子だが、下町南千住に生まれた。「川萬」という乾物屋の三男である。小さい頃から、隣の浄土宗公春院に入り浸って、立川文庫、講談倶楽部、吉川英治、直木三十五などを読み耽った。そして僧侶になるべく大正大学に入り、滋賀県甲賀郡の福生寺へ修行に行くこととなった。声もいいし、記憶力も抜群で、お経は苦もなく覚えた。得度式を受け、福生寺住職高尾大順から正順という名を貰ったが、結局逃げ出す。生来の下町っ子なのである。

明治大学の政経に入りなおし、卒業後、日本放送協会に就職する。「大学は出たけれど」

の時代であった。千人中二十三人の難関。巷談本を読み耽ったこと、僧侶の修行で物怖じしないところが、面接においてうまく発揮できたのであった。近所では「川萬」のドラ息子がねえ、と首を傾げたという。

昭和18年10月20日、名アナウンサー和田信賢は新橋の酒場で飲み潰れていた。日本の主力艦隊はもはやなく、ガダルカナルの惨敗、アッツ島玉砕、太平洋戦争の帰趨は、はっきりしていたのだった。翌朝、彼は実況中継をしなければならなかった。明治神宮外苑陸上競技場。学徒出陣。

翌21日、小雨降る肌寒い朝であった。

放送時間ぎりぎりに酷い二日酔いで現れた和田は、後輩志村正順に「おまえ、やれ」と一言だけ言った。

志村は愕然とした。補佐役のはずだった。原稿などはない。あるのは式次第の紙切れ一枚だった。

「征く学徒、東京帝国大学以下77校」志村は

度胸を決めた。「慶応大学、早稲田大学、明治大学、法政大学、中央大学」ただひたすらに読み上げた。三八歩兵銃を肩にのせ、黒い制服制帽、ゲートル姿の学生たちが校旗を先頭に入場してくる、その学校名を列挙した。

「日本大学、専修大学、立教大学、拓殖大学、駒澤大学、立正、農大、日本医科大学、大正、上智大学、國學院、東洋大学」

よどみなく続いた。この実況が放送史に残る大放送となることなど夢にも思わずに志村正順は、眼前に見えるものだけを描写した。

戦後のNHKのスポーツ中継には、このときの志村の方式が、いわば教科書となった。

志村は戦後、野球では小西得郎、相撲では神風という名解説者を見出し、名調子の実況で国民的人気を得た。

武田泰淳、志村正順。二人の、浄土宗ゆかりの人物の戦前、戦中、戦後。

触れ合うこともなかった二人の人生だが、生きた時間は共有されている。

およそ「生きていてよかった」と思ったのちに辿り着く「生きて行くことは案外むずかしいのかもしれない」の懷述がある。

思想も生き方も違うこの二人が、ある瞬間に、まったく別の場所で、しかし同時に「南無阿弥陀仏」と称えたことがあった。その同称を感じることができる。

法然上人を
めぐる人々

一の谷



◆第七回◆

石丸晶子

絵・石川忠夫

(四)

平家の屋形に火がつけられた。

折あしく鉄拐ヶ峰から吹き下ろす山風が激しく吹いているさなかであった。

平家が陣屋をかまえていたところは、うしろは絶壁で仕切られ、前は海に向かって開けてはいるものの、そのとば口はすぼまった形になっていて、そこに火がつけられたのだからたまったものではない。たちまちあたり一面にうす黒い黒煙が充満し、陣屋にいた教経ら大將軍をはじめそこに屯していた武士たちは視界を失い、真黒い煙に、むせはじめた。

よもやうしろの絶壁から源氏が駆け下りてくることなどあるまい、と油断していたところに、突然襲ってきたこの有様である。

平家の軍勢は慌てに慌て、弓や矢をかまえ

るゆとりなどあればこそ、そんなゆとりなどないうちに、黒煙にむせ、視界を失ったまま馬から転げ落ち、敵と戦わずして、われ先にと海に向かって逃げ出した。

そして鉄拐ヶ峰の総崩れは、それにつづく一の谷の戦場の総崩れも同様に呼びおこし、数万の將兵たちの大混乱となって、人々はいっせいに、海に向かって逃げはじめたのである。

鉄拐ヶ峰と一の谷の前方には須磨の浦が広がっている。

將兵たちはいっせいに、その須磨の浦へ、あるいは陸路をしばし西へ逃れて明石の浦へ、と殺到した。

平家はもともと水軍に強く、このときも中国地方や四国の各地で調達した多数の船を海上に浮かべていた。

海に向かった人々は、四五百人、五六百人

とかたまりになって、われ先にと海岸近くに停泊していた船に飛び乗った。

鎧甲に身をかためた者たちが、うしろの敵に追われ、われ先にとび乗ろうとするのだからよからう筈がない。大船が三艘まで沈没し、多くの者が助からなかった。

どうにか沈まずにすんだ船においても事情は変わらない。武者たちがやっと船べりに辿りつき、船の中に飛び乗ろうとすると、船中の人々が、

乗せまい

として彼らを太刀や長刀で、薙ぎ払ったのである。身分ある武将は乗せるが、名もなき雑兵たちは乗せまい、としたのだ。

そんな光景を岸で目にしながら、それでも背後から迫る源氏の侍たちに追われて、海の中に入り、平家の船に向かって泳ぎ、船べりにとりついて薙ぎ払われ、海中に沈んだり或い

は味方から腕を打ち切られたりして、おめき叫びつつ死んでいく者の数もおびただしかった。

寿永三年（一一八四）二月七日、須磨の浦から明石の浦にかけての一带は、修羅の地獄と化したのである。

（五）

鉄拐ヶ峰の平家の陣では、大將軍教経とその兄通盛をはじめ武者たちは、万一敗れたときは明石に馳せ、そこから海上に用意された船で逃げる手筈になっていた。

ところが、源氏が陣屋に放った火によって、たちまちあたりは一面の黒煙におおわれ、一万余の将兵たちは阿鼻叫喚の修羅に陥って、戦さをするどころのさわぎではなくなってしまうのである。

黒煙の中で人々は互いの姿を見失い、さす

が剛勇をうたわれた教経も戦闘の指揮をとることなどができず、名馬薄墨に乗って明石を目ざして落ちていった。

一方、教経の兄通盛はいえ、黒煙につつまれてはつとする間もなく、弟教経をはじめ將兵たちの姿を見失っていた。

通盛は弟のような剛の者ではなく、戦場にあつてなお、雅びの心が忘れられない青年であつた。前日、教経の怒りを買って、招き臥していた妻の小宰相を明石に浮かぶ平家の船に帰しはしたものの、この日も武具の下衣には香をたきしめ、顔にはうすく化粧をしていた。

そんな状態で二月七日の早暁、彼は陣屋で仮寝をしていた。そこへ、突如として義経率いる三千余騎がうしろの絶壁から駆け下り、火を放ったのだ。

それに気付いたとき、まわりにはすでに教

経の姿は見えず、彼は慌てて燃え上がる陣屋の外につないでいた馬に飛び乗ると、西を目ざして死に物狂いで落ちていった。

平家の武者たちがあるいは騎馬で、あるいは走って、西に向かってなだれを打って逃げていく中で、通盛も馬に鞭をあててあてた。

死の恐怖が迫ってくる。

いかにしても生き延びたい、生き延びなければならぬ、と通盛は念じつづけた。

きのう、平家の船に送り返してやったばかりの小宰相と、からだを合わせたところが通盛の脳裏を占めていた。

死ぬことはできぬ。妻はわが子を身こもったといったではないか。この通盛は今、三十歳にして、はじめてわが子というものを持ち、父となることができるのだ。生まれてくる子の顔をみたい――。

通盛は一心に念じつづけた。



とそのとき、彼の思念の中にきのう小宰相がいったことばが甦ってきた。あのとき妻はこういつていた。

「——戦陣で殿がお縋りできるのは只一つ、法然上人のみ教えで、あみだ仏への念称だけでございます」

そうだ、法然上人のみだ仏への念称。

なむあみだ仏

なむあみだ仏

馬を走らせながら、通盛の心にはもう、あたりの混乱した戦場の光景は入ってこなかった。

彼はいつしか、明石を目ざし、ただ一心に念称していた。

とそのとき、はっと気付くと、通盛は数人の源氏の武者に取り囲まれていた。

——おお法然上人、法然上人、みだ仏、小宰相——

それらの熱い思いが、一瞬、一つになって通盛の心をかけめぐった。

とそのとき、源氏の武者の大刀が通盛の首をさし貫いた。

——平通盛、討死、三十歳。

(六)

山の手の陣で教経、通盛に次ぐ立場にあった越中前司盛俊は、意味をおびた赤色の直垂ひたれに、赤い華紐で緘せじした鎧を着て、黒煙もうもと立ち込める中を、白月毛と命名された馬に乗って落ちていった。

今は一門からはずされて侍大将の地位にあるが、四代前までさかのぼれば、平家一門の人々と祖を同じくする平家の支流。特にこの盛俊は「七十人力」と人々に恐れられる豪勇の武将であった。

「さて、どこへ落ちていこうとも、この敗け

戦さ、首尾よく通れきれようか」

落ちゆく途中、念頭を離れないのはこの思
いである。

彼は道の途中で馬を止め、一人の敵でも打
ち倒さんとして待つことにした。

と、そんな盛俊に目をつけ、鞭をあげて馬
を速めてきたのが、源氏猪俣党の武者近平六
則綱である。盛俊が平侍でないことは、身
につけている鎧冑や名馬とおぼしい馬の姿か
ら判明できた。

盛俊と則綱は互いに馬を押し並べ、馬上で
組み合っていたが、やがてどうとばかりに二
人とも馬から落ちた。

則綱も東国八カ国にその名が聞こえた剛の
者であつたけれども、七十人力をうたわれる

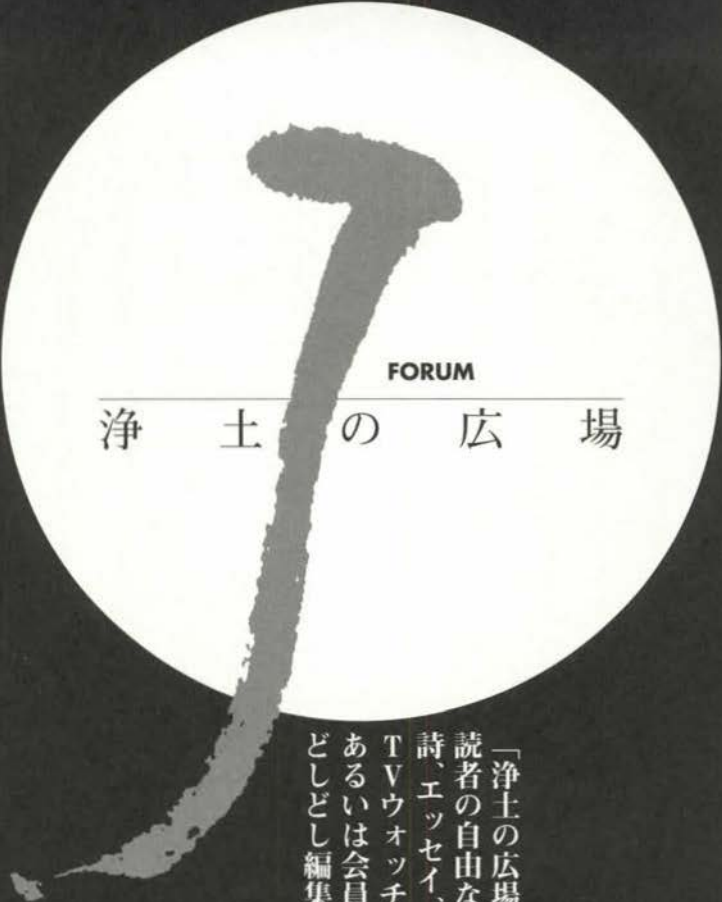
盛俊にはかなわない。しばしの間、互いに上
になり下になりしていたが、やがて盛俊がし
つくと則綱を下にして押さえつけた。

（これほどの則綱を手ごめにして締めつける
者が平家にいたとは思わなかった。もしや、
これは平家方で名の聞こえた越中の前司では
あるまいか）

そう心に思つた則綱は、相手より力は劣つ
たけれども元来が気性激しい剛の者。すこし
も騒がぬ様子でいった。

「そもそも、貴殿は平家方では名のある方で
ありましょう。敵を討つということは、互い
に名乗りあつてこそおもしろいもの。お名前
をお聞かせくだされ」

（つつく）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

3 歳児

せかいじゅうみんながなかよしうれしいな
いちごばたけたいようあびてまっかつか
つきのよるあしたははれになるのかな
もみじのてちっちゃいけれどまほうのて
ゆきだるまつくっておててがあかくなる
せみくんばみんないてうれしそう

小川 輝
鈴木 沙季
青木 一将
長谷川 将大
松崎 由依
豊田 雅人

4 歳児

おそとでねこおりのかがみひかっている
いちようのはかせといっしょにおどっている
みてみてねばってんせんのひこうきぐも
せみのこえまちどおしいななつやすみ
すずめがねさむいさむいとふくれている

平間 夏乃
根本 大輝
沼口 美沙
井上 泰斗
海老原有利加

しいたけをさかさまにしてこまになる

5歳児

どんどやきだるまがもえてあつそうだ
 ぼくとママかげもなかよしてをつなぐ
 ふうせんにつてみたいなおてがみと
 まるいにじとんねるくぐるおそらたち
 おそらにねじいちゃんのほしひかてる
 だるまさんころぶよころぶいたたたた
 タンバリンみんなのがつきにまけないぞ
 おこめときがしやがしやとさわいでる

石川 直輝

高根沢 紘矢

富田 将生

塚原 真菜

田崎 朱里

常盤 夏美

風野 真穂

鈴木 陸斗

飯田 真基

こどもの俳句

真壁保育園園児の句集平成16年版より

浄土誌上句会



●自由題

〔特選〕夕暮れて桜が桜這いのぼり

山口 裕子

夕暮れが近づくにつれて、陰りやすい辺りから次第に華やきが薄れてゆく。という見方をすれば、陰が這いのぼるのだろうが、道に暮れ残るところに焦点を当てれば、こうなるのだろう。面白い表現である。

〔特選〕散るばらと咲くばら少し触れ合いぬ

齊田 仁

花を離れた一ひらの花卉が、すぐ下の花に触れて落ちた。それだけだが、「少し触れ合いぬ」と表現されると、まるで軽く挨拶を交わしてというふうにも見えてくる。原句は「バラ」と片仮名だったが、平仮名でよい。

〔特選〕

嫁の来ぬ村黙々と田を植える

助田 和江

跡継ぎ達は村に引き止められるのに、女性
はどんどん出てしまう。当然嫁不足になる。
出て行った娘たちのことは放っておいて、嫁
が来ないと嘆く。あげくの果てに、外国にま
で声をかける。笑えない現実である。

〔佳作〕

白牡丹夕餉は少しふしだらに

村松 芳郎

薔薇園に小腹がすいておりにけり

内藤 隼人

墓石の丸みを帯びて夕桜

葦名 宗一

桜より仄暗き目をしていたる

中村 橋男

脱げやすい草履を脱ぎて夏座敷

雪我 狂流

げんげ田の本降りを傘ふたつゆく

蜂谷 弓彦

時たまの出会いに酌みし花見酒

中村 真一

ゴルフアールの計る歩幅に芝萌ゆる

島谷ときを

樹齢など話しをこそこそさくら描く

野村 昭輝



論 布 自由題

③季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

参加作品.....編集部選

気入りの筆さらさらと花便り 河合富美枝

風わたる短き春の気もそぞろ 堀 菅子

遅咲きの桜と気付き安堵する 山本美代子

編集部の手違いにより、五月号の兼題が重複してしまいました。六号は全句自由題として選句していただきました。読者各位、選者増田河郎子先生にはまことに御迷惑をおかけしました。謹しんでお詫び申し上げます(編集部・佐山)

締切・二〇〇四年六月二十日

発表・『浄土』二〇〇四年九月号

選者・増田河郎子(「南風」主宰)

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

向こう岸草摘む一の立ち屈み 浜口 佳春

戒王寺の女身哀れや春の雷 谷 しげ子

こうなごのくぎ煮しており日曜日 佐藤 まり

羽根納む川面の隅の残り鴨 井村 善也

島の子ら加害授業の蔬菜摘み 浜口 佳春

さくら貝掬う男の素足かな 増田 信子

桜鯛跳ねて計量定まらず 石原 新

風向きの変わりし岬落花霏々 池田 伊吹

潮を吹くあさりの皿に計り売り 西井 正

花鉢を移せば蝶のこぼれけり 寺下 忠至

魚干す花菜明かりの海女の庭 北川 弘子

花陰や伸ばす喪服のたたみ皺 蘭田 郁子

さっちゃんはネッ

00かい目

かまち♡ふらう



編集後記

青梅を母の忌日に供えけり

岱潤

永六輔さんの『伝言』という本に、「むかしは、用があると、借りてでも電話したものです。いまは、用がないと電話しているようで」という話が出ていて、思わず頷いた。

また同じ本に子ども電話相談室の話が出ていた。「動物って言葉を使いますか」という質問が良く来るそうだ。この時の動物学者の答えは「言葉を使えるのは、唯一人間だけです。猫や犬同士話をしてるように見えても、あれは言葉ではなく符号です」というものだ。そしてその後の永さんの言葉がおもしろい。「ところが最近符号だけで話しているように見える若い人たちが増えていて。——中略——メールとか携帯電話とか、とにかくふん

だんに話をしているのに、使う言葉の数が極端に少ない」。

先日講習会で宗教社会学の武田先生が「個人指導の日にちを伝えると、以前は電話ですまなそうに欠席を伝えてくる学生が何人かいて、後数人は無言欠席だった。今は携帯メールで全員が『いけません、ごめんなさい』と打ってくるが、ちつともすまなそうには思えない。メールは言葉の伝達は出来ても人間関係を希薄にする」。そんなお話があった。

『沈黙なくして言葉は存在しない』という言葉があります。携帯電話の普及の中で言葉が氾濫しているように見える現代、逆にその言葉の意味、価値がこれほど問われている時代はないのかもしれない。(長)

雑誌『浄土』
特別会員、維持会員の方々

巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大田秀三(大本山清浄華院)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光円寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
塚田弘導(平塚・晴雲寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
真野龍海(芝・天光院)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)

敬称略・五十音順

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>

編集顧問

大室了皓

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

村田洋一

浄土

七十巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十六年 五月二十日
発行 平成十六年 六月一日

発行人

編集人

真野龍海
佐藤良純

印刷所——株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇一八〇・八・八二八七



昭和50年2月号



昭和50年3月号



昭和50年4月号



昭和50年5月号



昭和50年6月号



昭和50年7月号



昭和50年8月号



昭和50年9月号



昭和50年10月号



昭和50年11月号



昭和50年12月号



昭和51年1月号



昭和51年2月号



昭和51年3月号



昭和51年4月号



昭和51年5月号

法然上人鑽仰会の

本

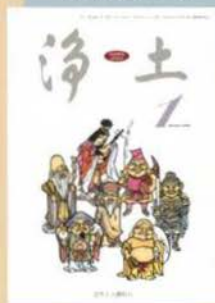


『念仏讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円

月刊『浄土』
バックナンバー



※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話／03-3578-6947
FAX／03-3578-7036